

竹川病院

症 例 概 要 患者：60代 男性

疾患名：右被殻出血（CT分類Ⅲa）

令和3年9月中旬、経営していたそろばん塾の講義中に生徒たちの前で卒倒し、救急搬送され右被殻出血の診断を受け保存加療の後、17病日に当院回復期リハビリテーション病棟に入院しました。入院時体幹・左上下肢の運動障害および多彩な高次脳機能障害を認めました。生活での左上肢の使用は困難であり、介助なしでは立位保持が困難なため病棟での移乗は2人介助でした。リハでは早期から運動障害に対してロボット療法を導入し、高次脳機能障害に対してはリハビリテーションツールを使用した評価・介入を実施しました。退院時には目標であった右手でそろばんを操作しながら左手で伝票をめくることができるようになり病院内の生活は全て自立しました。

入院時FIM 54/126点（運動FIM 30/91点） 退院時FIM 121/126点（運動FIM 89/91点）

内 容

令和3年9月中旬、経営していたそろばん塾の講義中に生徒たちの前で卒倒し、T病院に救急搬送され右被殻出血の診断を受けました。保存加療の後、17病日に当院回復期リハビリテーション病棟に入院されました。

入院時は体幹・左上下肢に重度運動麻痺・感覚障害などの運動障害および左半側空間無視や注意障害、記憶障害など多彩な高次脳機能障害の影響により生活での左上肢の使用は困難であり、車椅子から左上肢が落下したり、起居動作で左上肢を忘れてたりと管理が不十分でした。また、介助なしでは立位保持が困難で、左下肢が躓き姿勢を崩すことが多く体格も大きいため病棟では移乗を2人介助で、運動FIM30点でした。発症して間もなくお母様が逝去され、精神的負担が大きく、「このまま歩けないで一生車椅子かな」とネガティブな発言が多く聞かれていました。しかし、そのような状況下でもそろばんを通じて子供たちの無限の才能と適性を見つけ出し大きく育てていきたいと前向きな発言もあり、ご家族からは営業時間や形態を変更してでも復職が出来ればという希望がありました。ご本人やご家族、チームで協議し、①右手でそろばん操作をしながら左手で伝票をめくることができる、②課題プリントを見落としなくチェックができる、③歩行補助具を用いて屋内外の移動ができることを最終目標とし、入院期間は4.5ヵ月としました。

リハでは早期から運動障害に対してウェルウォークWW-2000やReoGo-Jなどのロボット療法を導入

し、高次脳機能障害に対しては@ATTENTIONなどのリハビリテーションツールを使用した評価・介入を実施し、病態に合わせた介入を実施しました。ご本人は歩行に対して特にネガティブな発言が多かったありますが、ウェルウォークWW-2000はロボットの補助を精密に調整することで困難課題を回避し、常に適切な難易度の練習を提供することができ、少ない介助量で練習を提供できるため、ご本人の動機づけに繋がりがやすく、次第にリハに対し主体的に取り組むよう行動変容をもたらしました。前述した介入をしたところ劇的な心身機能の回復がみられたため、生活での左上肢の使用頻度向上や動作の獲得を目的にCI療法を行い更なる左上肢機能の向上を図りました。また、活動量や運動量の確保を目的に病棟での歩行機会の獲得のため心身機能及び高次脳機能に対する注意点を病棟スタッフと共有し、見守り下で短下肢装具とT字杖での歩行を導入し、ReoGo-Jはセルフトレーニングに移行しました。その結果、60病日には歩行補助具を使用せず独歩で病院内自立、屋外歩行が連続3km以上可能となりました。また左手で茶碗を持つ・ファスナーの開閉を行うなど生活での左上肢の参加もみられ、目標であった右手でそろばんを操作しながら左手で伝票をめくることができるようになりました。運動FIMは89点で病院内の生活は全て自立しました。高次脳機能障害の影響により文章のチェックでは一部見落としがあったため、ご家族にサポートが必要なポイントを伝え円滑に復職が果たせるようお伝えしました。

今回、ご本人の回復段階に合わせ課題難易度調整が容易かつ目的動作のフィードバックがしやすいロボット療法を取り入れたことで運動学習を促進でき、多彩な高次脳機能障害の影響を踏まえながら心身機能の向上に合わせて安全にADL変更を行うために病棟スタッフと密に連携をしたことで我々の予測を超えた回復に寄与し、目標を達成できたと考えます。